

ふくしま 蚕繭

その二

タカラモノニュース 第一九号

「用具から物語が見える」

泉原養蚕用具整理室・泉原養蚕展示室

「ボランティアでいいから、整理させてください」

平成三十一年三月二十八日、「伊達の蚕種製造及び
養蚕・製糸関連用具」計三四四点が、国の重要有形
民俗文化財に指定された。

国の重要有形民俗文化財とは、衣食住、生業、信仰、
年中行事などに関する風俗慣習、民俗芸能、民俗技術
などに用いられる衣服、器具、家屋などのうち、特に重要
なものとして国が指定したものである。それらは今、伊達
市霊山町の「泉原養蚕用具整理室」に収蔵されている。





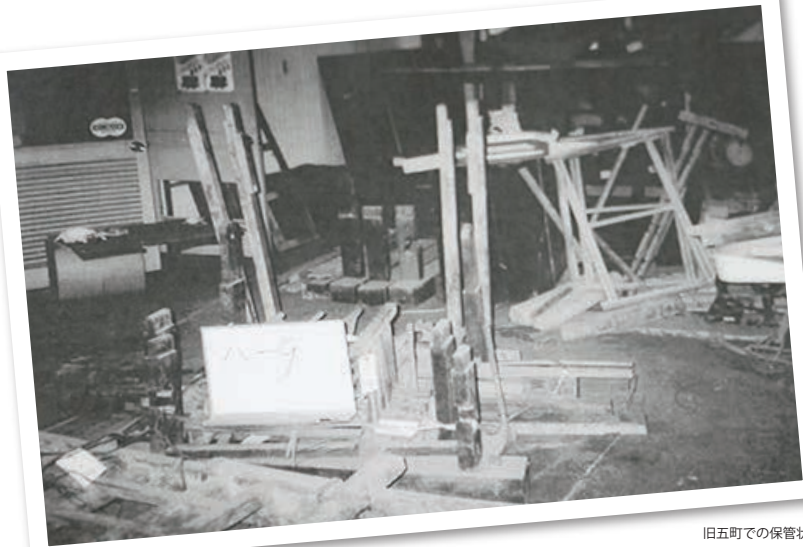
「泉原養蚕用具整理室」は、廃校になった旧泉原小学校を活用して平成二十四年に開設された。養蚕の仕事を紹介する展示室を備え、現在は、丹治純子さん、柴田明美さん、三品寛子さん、鈴木百合香さんの四人の女性が勤務している。この整理室ができたきっかけ、さらにいえば伊達の養蚕用具類が国の重要有形民俗文化財に指定されたきっかけは、丹治さんのひとことにあったといっても過言ではない。

さかのぼること昭和五十四年。靈山町では町史編纂のために町の重要産業であった養蚕の歴史をまとめようと用具類を集めることになった。伊達地域の他の町でも同様に、町史編纂を機に用具類を集めた。農家の物置や商店の倉庫に眠っていた様々な用具がわらわらと集まってきたが、どの町でも、それらは数か所に雑然と保管されたまま、再び三十年以上の眠りにつくことになる。

伊達五町の合併前、靈山町中央公民館に勤務していた丹治さんは、使われなくなった稚蚕飼育所に集められていた用具類に心を痛めていた。こんな状態では資料として子どもたちに見せることもできない。このままゴミで終わらせたくない。思わず町の教育委員会に直訴してしまった。「ボランテアでいいから、整理させてください」。



丹治純子さん



旧五町での保管状態

文化財にしよう

元県蚕業試験場長の柳沼泰衛さんらと共に整理を始めたものの、作業は根気のいるものだった。まずは雑然と集められた用具を「生活用具」「農具」「養蚕用具」に仕分けすることから始め、ついに倉庫同然だった稚蚕飼育所を展示場に変身させた。これが合併後の伊達市教育委員会の知るところとなり、勢い「文化財にしよう」という機運が高まった。

伊達市旧五町でそれぞれ保管していた養蚕用具類の所在地と点数の確認調査を経て、平成二十年、「伊達地方の養蚕関連用具」は登録有形民俗文化財となった。これが追い風となり「もう一つ上げよう。重要文化財にしよう」、伊達市教育委員会の英断で目標はさらに高まったのである。

長く険しい道の始まり

登録有形民俗文化財に登録されたといっても、用具類の保管状況は依然として、各町バラバラ、雑然としたものだった。登録には所在地確認で十分だったが、重要文化財となるとそうはいかない。指定には厳しい基準があり、相応の準備が必要だった。そのためにつくられたのが「**泉原養蚕用具整理室**」である。

平成二十四年の開設を丹治さんと共に迎えたのが柴田さんである。伊達市の歴史文化資料館の求人企画展示などを夢見て応募した柴田さん、整理室への配属を「だまされた」と振り返る。

二人を待っていた最初の仕事は「**かたづけ**」だった。廃校になったばかりの旧小学校は、児童の机と椅子こそ運び出されていたものの、教壇や備品、保健室のベッドまでそのままに残されていた。毎日毎日、それらを片付けて掃除する。それが三か月ほど続いたのだから無理はない。



ピカピカにすればいいってもんじゃない

① そうじ



それぞれの町でホコリをかぶっていた養蚕用具類が整理室に集められることになったが、すべてを持ってくるわけにはいかない。まず、保管されている場所に向いて、持ってくるものを選別する。それを軽トラックに山積みして運んだあとは「そうじ」だ。簡単に言えば用具をきれいにすることなのだが、ピカピカに磨けばいいというものではない。繭のケバがついていけば残すし、キズや痛みも直してはいけない。手垢さえも文化財なのだ。「そうじ」はシルバー人材センターから派遣された地元のみなさんに手伝ってもらっていたが、理解してもらうのはとても難しかった。汚れていけばキレイにしたい、壊れていけば直したい。実直さと善意ゆえの性分なのだから仕方がないが、けっこうバトルもあったという。

何に使ったかわからないものは文化財にならない ②文献調査



明治時代に発行された「蠶業大辭書」

使用当時と変わらないようにそうじされた用具も、見ただけでは何に使うのかわからない。それでは文化財にならない。丹治さんとはもなく、柴田さんも、遅れて仲間となった三品さんも鈴木さんも、この地でむかし養蚕が盛んだったことは知ってはいたものの実際に目にしたことはない。明治・大正の用具ともなれば聞き取りしようにも尋ねる相手がいない。そこで頼ったのが文献である。幸い、一大産業だった養蚕に関する本はたくさん出版されていた。蚕の学校でもあった明成高校（旧農蚕高校）を訪ねてめばしい文献をチェックし、ネットで買って調べた。用具だけではわからないことが、文献を調べることによって見えてくる。何に使ったのか、いつ使ったのか、どうやって使ったのか。当時の人々の暮らしぶりが見えてくる。

用具の中には「墨書」という書き込みがあるものがある。購入した年月や自分の名前などを記したものである。ある「桑こき機」に「大器械 明治三十六年」とあった。それまで一枚一枚手で採っていたのが、これを使うと「あつ」という間にかきとれる。「大いなる器械」という感嘆を込めたのだろうと想像できる。

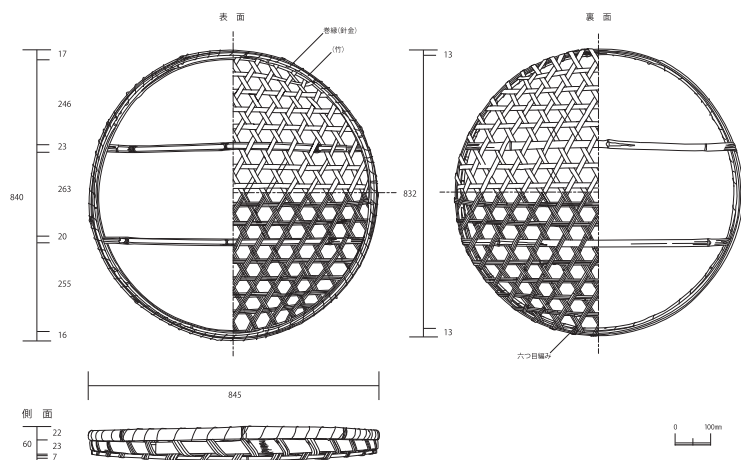
調査中にこんな「事件」があった。整理室では展示もかねて実際に蚕を飼っている。ある朝、出勤すると蚕たちの元気がない。棚の上の物が倒れているし、前年の繭がボロボロになっている。さらに翌日、翌々日と、蚕の数がだんだん減ってきた。これはネズミの仕業ではないか？ 寄贈された用具にネズミが潜り込んでいて悪さしているのではないか？ ネズミ捕りを仕掛けたり、業者に駆除を依頼したりしたがネズミは捕まらなかった。しかし不思議にもある日を境にピタッと被害は止んだ。文献に「養蚕用具」という明治時代の絵がある。様々な用具が一覧になった一枚の絵だが、その中に猫が描かれている。昔の人も同じようにネズミに苦勞していたんだな、と思いを重ねられる出来事だった。





四六五〇点 ㊤ 収蔵台帳

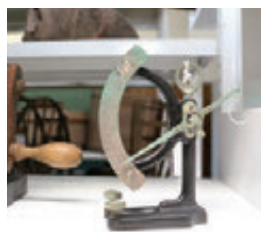
用具と情報がそろったら、それを整理し収蔵台帳にまとめなければならぬ。ひとつひとつの用具に識別番号をつけ、写真、名称、用途、年代、特徴などを記録するのである。台帳なんてだれも作ったことがないから、作り方がわからない。他の地域の台帳を参考にしたり、文化庁の調査官に相談したりしなくてはならぬとか独自の台帳を作った。登録後に寄贈された用具も多く、作った台帳の点数は四六五〇点。中にはお札など十数枚でも一点と数えられてしまうものもあるため、用具類の数は五〇〇〇点ほどにはなるといふ。



見えるとおりに描いてはいけない ④実測図

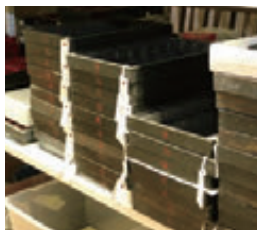
収蔵台帳とともに文化財の資料化に欠かせないものが「**実測図**」である。用具を計測し素材や墨書などの情報を図面にしたもので、文字では言い尽くせないことや、写真では表現できない部分を明確にする。それらの情報が失われつつある用具を後世に伝える貴重な資料となるのだ。

三次元の立体物である用具を、二次元の平面図形として描くというのは思うほど簡単ではない。まず、寸法通りに**正確な縮尺**で描かなければならない。内部構造までわかるように描かなければならない。さらに、使用状態が正しく理解されるように描かなければならない。ざるやかごは編み方がわかるように描かなければならない。見えるとおりに描けばいいのではないのだ。手探りのうえ根氣がいる作業で、最初の頃は点描くに一週間以上かかった。本来なら指定を受けようとする三四四点すべての実測図を起こさなければならぬが、あまりに緻密な作業なので文化庁から「種類一点に免じてもらった。それでも四九二点、大変な作業だったが、ここまで正確な実測図はほかにないと自負している」。



台帳、実測図、そして報告書を添えて文化庁に提出し、無事、「伊達の蚕種製造及び養蚕・製糸関連用具」計一三四四点は、国の重要有形民俗文化財に指定された。「泉原養蚕用具整理室」開設から七年、気が遠くなるような作業の連続で、途中なんども、終わらないのではないかと思ったという。

今は、七月からの「国重要有形民俗文化財指定記念企画展 明治の到来と伊達の蚕種業」の準備に忙しい。企画展では用具類だけでなく、文書（もんじょ）も展示する予定だ。文書には、蚕種屋がどうやって全国各地に種を売り歩いたか、輸出用の種をどうやって運んだかなど、用具だけでは見えてこない物語も見えてくる。ぜひ見に来てほしい。





重要文化財は新たなスタート

最初は「だまされた」と思った柴田さんも、整理作業を通じて多くの気づきを得た。実測図を描くことは用具と一対一で向き合うこと。見て描いて終わりではない。それでわかった気になってはいけない。用具に近づき意味を理解し特徴を引き出すことで用具は生きてくる。観察することが大事だという。

三品さんは、ここで働いていなければ自分の周りの大事なものに気づかなかっただろうという。明治期生糸輸出世界一を支えた人・物・技術が身近にあったことを知り、伊達市を誇りに思うようになった。

鈴木さんは、家族と話すことが増えたと喜ぶ。ある日、お母さんから「昔、養蚕農家に手伝いに行つて、こっそり蚕を二匹持って帰って繭にした」と聞かされた。鈴木さんが知らなかった母の一面である。



タカラ印刷株式会社

〒960-8141 福島市渡利字絵馬平86-9 TEL.024-526-4303 FAX.024-526-4302
http://www.takara.inaka.co.jp E-mail sky@inaka.co.jp

ふくしまの養蚕は、これからがおもしろい。

「ふくしま 蚕・繭」その二 ― 二〇一九年七月発行

彼女たちにとって養蚕は昔のことではない。今の生活の一部である。そしてこれからの目標でもある。

「重要文化財になったことは新たなスタートです。どう活用していくか、どう情報発信していくかが重要ですが、自分たちだけではできない。多くの人といろいろなアイデアを出し合わなくてはならない」と決意を見せた。



柴田明美さん



三品寛子さん



鈴木百合香さん

国重要有形民俗文化財指定記念企画展

「明治の到来と伊達の蚕種業」

2019年7月20日(土)～9月29日(日)

◆伊達市保原歴史文化資料館

【開館時間】9時～17時

(入館は16時30分まで)

【休館日】火曜日

【入館料】大人210円(160円)

小中高生100円(80円)

※()は団体料金(20人以上)

福島県伊達市保原町大泉字宮脇265

(保原総合公園内)

TEL・FAX 024(575)1615

泉原養蚕用具整理室／展示室

【開室時間】9時～16時

【休室日】土日・祝日・年末年始

福島県伊達市霊山町泉原字米田5

(旧泉原小学校)